

復活した
伝統芸能

「広田御祝」にぎやかに

陸前高田市の被災住民

衣装流失も全国から支援



陸前高田市の伝統芸能「広田御祝」を披露する女性たち

東日本大震災の被災者に寄り添いながら被災者と奥州市民の交流を続けているホムンティア団体「奥州絆の会」(渡辺明美会長)は19日、水沢区中上野町の陸前一宮駒形神社龍昇殿で交流会「3・11を忘れない!!」を開いた。今年は震災から5年となる節目の年。津波被害で途絶えていた伝統芸能が披露されるなど、楽しいひと時を過ごすしながら笑顔の絆を強めた。(佐藤和心)

水沢の交流会で披露

復興支援とともに震災の記憶風化を防ぐよう、活動を続ける同会、沿岸被災者や奥州市内に避難している人らを招いた交流会を毎年開いている。今年には花見も楽しむと、水沢公園に隣接する同神社龍昇殿を会場に選んだ。会員や被災者ら約50人が参加。交流会で花見を行うのは12(平成24)年以来4年ぶり。満開の時期にタイミングよく重なった。

余興では、陸前高田

市長洞地区の郷土芸能保存会長洞女性会(斉藤祥子代表)のメンバーたちが伝統芸能「広田御祝」を披露。女性だけで踊るのが特徴の演舞で、大漁を祝う気持ちが入められているという。5年前の津波で道具や衣装が全て流失してしまい、一時途絶えたものの、全国からの支援で2年前に復活。奥州市民に初お披露目された演舞では、「エトドッコラサー、エトドッコラサー」と参加

者たちが掛け声を合わせ、手拍子をしながら楽しんでいった。奥州市内で避難生活を送り、昨年陸前高田市に帰郷した奥州つばき絆の会前会長の佐藤

久也さん(86)は「奥州市の皆さんとは縁もありとてもお世話もなりました。いつも忘れないうでいてくれて本当にありがたいこと」と感謝。奥州絆の会の渡

辺会長(67)は「震災から5年1カ月。自立支援や復興支援の在り方を力を合わせながら考えていきたい」と決意を新たにしていた。